R. L. Stevenson as a Local Informant: The Late 19th-century Pacific in "The Beach of Falesa"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47019

現地の情報発信者としてのR. L.スティーヴンスン：「ファレサアの浜」と19世紀末の太平洋

山本　卓

R. L. Stevenson as a Local Informant: The Late 19th-century Pacific in "The Beach of Falesá"

YAMAMOTO Taku

西洋にとって太平洋は長らく現実感を伴わない場であった。たとえば16世紀初頭にはマゼランによって太平洋横断が敢行されているものの、大部分は依然として謎のままであり、ルネサンス期から18世紀初頭にかけての世界地図では南海大陸（Tera Australis）が南半球を覆っている。18世紀半ばジェームズ・クックによってようやく南海大陸の存在が否定されるが、探検家がもたらした太平洋の風習や逸話は、ヨーロッパ人の新たな妄想をかき立てた。とりわけ1789年に発生したバウンティ号の反乱は、奇跡的な生還を果たしたブライ船長の冒険もさることながら、南の島でのイギリス人男性とポリネシア女性との逃避行が、探検家がそれまで報告してきた「楽園」としての太平洋を裏書きすることになったのである[i]。その一方で、三回目の太平洋航海の時に起こったハワイ島民によるクックの殺害や、部族間闘争、食人の記録は、パラダイスの裏に潜む「野蛮」な太平洋像も作り上げてきた。18世紀末から開始されたロンドン伝道会による布教活動や、19世紀を通した植民地の拡大がもたらす知識の増大にも関わらず、「楽園」と「野蛮」という対立したイメージを喚起させる場として太平洋は機能し続けたのである。とりわけ19世紀半ばの冒険物語にとっては、それらは格好の材料になった。たとえば、ハーマン・メルヴィルの『タイピー』（*Typee*. 1846）では高貴な野蛮人と食人が交錯した空間が描かれるし、同様のテーマはR. M. バランタインによって『珊瑚島』（*The Coral Island*, 1858）という少年向け物語として受け継がれる。ただし、それらの描写の真実性についてはけっして十分とはいえない。『珊瑚島』の椰子の記述で致命的な失敗を犯したことからも分かるように[ii]、バランタインの作品世界は航海記などの伝聞や類似の物語を参照した想像の産物であるし、メルヴィルの実体験であるかのような印象を与える『タイピー』でさえ、多くの部分でそれまでに流布していた太平洋に関する言説を流用した。こうした借り物の創作によって、太平洋はヨーロッパ人にとって「非日常空間」であり続けた。

他方、19世紀半ばに始まるニュージーランドやオーストラリアへの移民の増加や捕鯨の隆盛によって、ヨーロッパから太平洋への渡航の利便性は向上し、1870年代にはアメリカ経由の定期航路が設けられた。時間と費用さえあれば誰もが最果ての地を旅することができるようになったのだ。そのような時代に太平洋に赴いたのが、『宝島』（*Treasure Island*. 1883）や「ジーキル博士とハイド氏」（"Dr. Jekyll and Mr. Hyde." 1886）などのベストセラーによって、すでに冒険作家としての名声を確立していたR. L. スティーヴンスンである。当初は健康の回復のための太平洋周航だったが、状態は思うように快方に向かわず、最終的には彼はサモアへの移住を余儀なくされる。しかしながら同時に、太平洋の航海とサモアでの定住はスティーヴンスンに新たな創作材料を提供することにな

平成28年10月３日受理

る。サモア紛争における大国の横暴を訴えた『歴史への脚注』(*A Footnote to History*. 1892)を出版する一方で、『難破船』(*The Wrecker*. 1892)、『島の夜の慰め』(*The Island Nights' Entertainments*. 1893)、『退潮』(*The Ebb-Tide*. 1894)といった物語では彼が見聞した実際の知識が題材として用いられた。とりわけ『島の夜の慰め』に収録された「ファレサアの浜」("The Beach of Falesá." 1892)では、彼はタブーをはじめとするポリネシア地域のさまざまな習慣、貿易商の実体を物語の中心に据え、いわば「現地の情報発信者」として太平洋における白人の姿を皮肉な筆致で描く。

本論考ではこうした現地の情報発信者としてのスティーヴンスンに着目し、「ファレサアの浜」におけるアイロニカルな描写の有効性とその背後にある彼の意図を検証する。果たして彼が意図したように、作品はそれまでの冒険物語とは異なる現実性を作品に内包できたのか、それとも冒険物語のジャンルで伝統的に利用され続けてきた太平洋像を再生産しただけなのか。こうした問題をサモア人作家アルバート・ウェントのスティーヴンスン受容を参照しながら論じる。そして、西洋に対して太平洋の現状の提示とその批判を試みるものの、スティーヴンスンは当事者性を強調するあまり、かえって現実感が損なわれるというジレンマを抱えていたことを指摘する。

I　現地の情報発信者

1890年1月スティーヴンスンはサモアのヴァイリマの土地購入の契約を結ぶ。その後、健康状態の改善を兼ねて、シドニー、オークランド、サベージ島(現ニウエ)、ギルバート諸島、マーシャル諸島、ニューカレドニアを巡ったあと、同年10月には半ば完成した家屋での生活を始める。その時の彼の様子はシドニー・コルヴィンに宛てた書簡に綴られている。

> This is a hard and interesting and beautiful life that we lead now. Our place is in a deep cleft of Vaea Mountain, some six hundred feet above the sea, embowered in forest, which is our strangling enemy, and which we combat with axes and dollars. I went crazy over outdoor work, and had at last to confine myself to the house, or literature must have gone by the board. *Nothing* is so interesting as weeding, clearing, and path-making. . . . (19-20)

死後に出版される『ヴァイリマ・レター』(*Vailima Letters*. 1895)の冒頭を飾るこの一節は、痩せて神経質そうな顔つきをしたスティーヴンスンのイメージを裏切る[iii]。ここに存在するのは、野外の力作業で汗を流し、夜になってようやく家にとじこもる健康そのものともいえる人物である。しかもこの作業はスティーヴンスンだけが行うのではない。引用の続きには森を開墾する使用人の様子が語られるし、家屋が完成した後もスティーヴンスンは多くのサモア人を雇い入れ、彼らとともに暮らした。また書簡では彼がサモア人と身近に交流することで得た土地の風習にもしばしば言及される。たとえばサモアの土着の悪霊であるアイトゥのうちでも、女性のそれが山に出現する挿話などが収められている(61-2)。こうした話題はエッセイ『南海にて』(*In the South Seas*. 1896)にも多数収録されているものの、『ヴァイリマ・レター』における著者の状況は大きく異なる。『南海にて』のスティーヴンスンのスタンスが基本的には訪問者のものであった一方で、後者では居住者の視点から語られるのである。彼はより島の実生活に即した「現地の情報発信者」という地位を獲得することになる。

太平洋は西洋の反対側に位置するため、スティーヴンスンは自らの作品の出版や、他の作家の作品の入手に余計な手間を払うことになる

が、「現地の情報発信者」という立場は彼の執筆活動に大きく寄与することになる。もっとも明らかな事例がサモア紛争への彼の積極的な関与だろう。サモアを巡るドイツ、アメリカ、イギリスの領有権争いは1880年代半ばには始まっており、スティーヴンスンがタイムズ紙に宛てた最初の意見書は、サモアに到着する前の1889年3月に送られているが、ヴァイリマへの定住以降、族長たちと交流の深さを物語るように同様の意見書の数は増加し、1892年には『歴史への脚注』を出版するに至る。ここでスティーヴンスンが強調したのが、サモアに住んでいるという当事者性である。

> An affair which might be deemed worthy of a note of a few lines in any general history has been here expanded to the size of a volume or large pamphlet. . . . It has been a task of difficulty. Speed was essential, or it might come too late to be of any service to a distracted country. Truth, in the midst of conflicting rumours and in the dearth of printed material, was often hard to ascertain, and since most of those engaged were of my personal acquaintance, it was often more than delicate to express. I must certainly have erred often and much; it is not for want of trouble taken nor of an impartial temper. And if my plain speaking shall cost me any of the friends that I still count, I shall be sorry, but I need not be ashamed. (69)

「現地の情報発信者」という観点に立つと、後半部の記述がとりわけ重要である。「相矛盾する噂が飛び交い、出版物が手に入らない状況においては、真実はなかなか突き止められない」と、彼の見解が不完全なものである可能性を認める一方で、著作に登場する関係者の大半が彼の個人的な知己であることを告げる。スティーヴンスンとしては、彼の十分に客観的とはいえない意見が友人を失う危険性を孕むことを承知の上で、その道義的正当性を主張したかったのだろう。しかし、こうした個人的な関係を挙げることは、同時にスティーヴンスンが有する「現地の情報発信者」という特権の示唆という側面を持つ。なぜなら彼はそれまで政治的な態度をほとんど表明せず、サモアと関わりを持つようになって突如、国際問題への関心が芽生えた政治の素人にすぎないからである。そうした立場においては、サモア問題についての主張の拠り所は、必然的に彼の当事者性となる。実際のところ『歴史への脚注』で大国批判を繰り広げるとき、スティーヴンスンの論点は当事者性の有無を問題化する。

> I am not asking what was intended by the gentlemen who sat and debated very benignly and, on the whole, wisely in Berlin; I am asking what will be understood by a Samoan studying their literary work, the Berlin Act; I am asking what is the result of taking a word out of one state of society, and applying it to another, of which the writers know less than nothing, and no European knows much. (222)

これは最終章からの引用であるが、著作を通したスティーヴンスンの論法が看取できる。対比されるのはベルリンとサモアで、当然のことながら両者の距離に焦点が当てられる。「(条項を)書いた人間も知らないばかりか、多くを知っているヨーロッパ人自体がいない」ような場所に西洋での決定事項を当てはめる愚かさを訴えるとき、スティーヴンスンが支援するのは民衆の支持の厚いマターファによる統治である。そしてマターファともっとも親密な関係にあった白人がこのスコットランド人作家であった事実は、ベルリンでの会議におけるヨーロッパ人とス

ティーヴンスンとの差異を明確にする指標となる。彼こそがサモアに暮らし、人々や習慣を熟知している当事者であり、島民のためにものを言う資格があるのだ。

スティーヴンスンの「当事者であること」の意識は、創作活動にも及んでいく。太平洋を舞台にした作品はいくつかあるものの、もっとも作家自身の当事者性が垣間見えるのは「ファレサアの浜」であり、それは執筆段階でのシドニー・コルヴィンに宛てた書簡においてはっきりと記載されている。

> There is a vast deal of fact in the story, and some pretty good comedy. It is the first realistic South Sea story; I mean with real South Sea character and details of life. Everybody else who has tried, that I have seen, got carried away by the romance, and ended in a kind of sugar-candy sham epic, and the whole effect was lost—there was no etching, no human grin, consequently no conviction. Now I have got the smell and look of the thing a good deal. You will know more about the South Seas after you have read my little tale than if you had read a library. As to whether anyone else will read it, I have no guess. . . . But there is always the exotic question, and everything, the life, the place, the dialects—trader's talk, which is a strange conglomerate of literary expressions and English and American slang, and Beach de Mar, or native English,—the very trades and hopes and fears of the characters, are all novel, and may be found unwelcome to that great, hulking, bullering whale, the public. (161)

旧知の間柄の遠慮のない書簡とはいえ、ここには作家の並々ならぬ自信が窺える。「ファレサアの浜」が「現実の南海を描いた初の作品」であるという宣言から始まり、過去の同様の作品は「口当たりのいいまがい物の物語」と言い切る。太平洋の生活感にあふれたこの作品を読めば、読者は「図書館へ行くよりも南海を知ることができる」という箇所に至っては、もはや彼の自負の大きさを疑いようがない。そのような文脈においては、引用の最後における読者の不興を買う可能性への言及も、単なるポーズにすぎず、むしろ彼が太平洋に暮らしている事実を強調する。とりわけ水夫たちが話すスラングやピジン英語といった独特の言葉についての知識が、あたかもスティーヴンスンに「現地の情報発信者」としての資格を付与しているかのようである。ただし、「ファレサアの浜」以外の『退潮』や『難破船』といった南海物語については、スティーヴンスンが物語における現実性をこれほど強調してはいないことを断っておかなければならないだろう。時系列的には『難破船』の執筆開始がもっとも早く、次いで「ファレサアの浜」、『退潮』となるが、前者二つの作品はほぼ同時に脱稿している（それぞれ1891年11月と10月）一方で、後者の完成は1892年6月となる。1891年12月28日付けのシドニー・コルヴィンへの手紙にある「『難破船』は書き終わったし、『ファレサアの浜』も書き終えた。『歴史への脚注』も半分書いた。すごい」（"*Wrecker* done, 'Beach of Falesá' done, half the *History*. *c'est etonnant*." 217）という記述からも推測できるように、上記の作品は作者の政治運動を共通の背景に持つものの、作品内での「現実の南海」表象についてはかなり異なる。また、太平洋を舞台とする物語の創作と平行して、この時期のスティーヴンスンは『カトリオーナ』（*Catriona*. 1893）、『セント・アイヴィス』（*St Ives*）、『ハーミストンのウェア』（*Weir of Hermiston*）など作品も手がけており（後者二作は未完）、これらの物語はサモアとはまったく関係がない。むしろスティーヴンスンの物語作品全体を見渡

すとき、作家の当事者性において「ファレサアの浜」が異質な作品として浮上する。

II 「ファレサアの浜」のアイロニー

「ファレサアの浜」は貿易商ウィルトシアと商売敵のケイスが太平洋の小島で繰り広げる冒険物語であるが、先に論じた作家の見聞に基づく太平洋の習慣や文化の表象以外にも、いくつかの点で従来のスティーヴンスンの作品とは異なる。たとえばヒロイン、ウマと主人公との恋愛といった愛憎劇はスティーヴンスンの他の作品ではほとんど見られない。また、パトリック・ブラントリンガーが指摘するように、物語の冒険の動因が経済活動であることも「ファレサアの浜」の特徴として挙げられるだろう[iv]。しかしながら、もっとも際立った差異は主人公の語りによって醸し出される皮肉な調子である。

辺境の地にやってきた貿易商という設定のため、読者はウィルトシアの言動に過度の洗練を期待することはないものの、物語では彼の一人称の語りによってその無教養さが過剰に強調される。たとえば、ウィルトシアがケイスに出会ったときの場面である。

> He was yellow and smallish, had a hawk's nose to his face, pale eyes, and his beard trimmed with scissors. No man knew his country, beyond he was of English speech; and it was clear he came of a good family and was splendidly educated. He was accomplished too; played the accordion first-rate; and give him a piece of string or a cork or a pack of cards, and he could show you tricks equal to any professional. He could speak, when he chose, fit for a drawing-room; and when he chose he could blaspheme worse than a Yankee boatswain, and talk smart to sicken a Kanaka. (3)

主人公はケイスの多彩な才能に圧倒される。彼は身だしなみを整え、芸事にも秀でているかと思えば、上品な言葉も罵詈雑言も使いこなす。そうした様子を集約したウィルトシアの台詞が「良家の出自で素晴らしい教育をうけている」というものである。もちろんこうしたケイスのポーズに騙されてしまうのは、無教養な主人公の思慮の浅さを示すための伏線なのだが、それは様々な場面で繰り返し提示される。とりわけ自らにかけられたタブーを解いてもらうために、ケイスとともに族長と交渉するときのウィルトシアの描写は、読者にとってはドラマチック・アイロニーの体をなす。

> You tell them who I am. I'm a white man, and a British subject, and no end of a big chief at home; and I've come here to do them good, and bring them civilization. . . . but if they think they're going to come any of their native ideas over me, they'll find themselves mistaken. And tell them plain that I demand the reason of this treatment as a white man and a British subject. (23-4)

ウィルトシアが村のタブーとなったのは、タブーがかかったウマと結婚したためで、そのタブーもケイスによって仕組まれた策略である。しかしながら、事情を知らない主人公は、ヨーロッパ人の優位を振りかざした傲慢な発言を繰り返す。当然のことながらウィルトシアには「文明をもたらす」意図などは毛頭なく、イギリスに帰ってパブを経営するために一山当てたいだけである。そうした主人公がポリネシア人を相手にしたときに、本来は彼自身の人種的偏見に過ぎないにもかかわらず、もっともらしく植民地主義の大義名分を持ち出す姿は、彼自身の価値観の皮肉になっているだけではなく、前章で指摘した『歴史への脚注』においてスティーヴンスンが訴えた大国の横暴への批判とも重なり

合う。

「ファレサアの浜」の展開において、スティーヴンスンの太平洋での見聞の顕著な痕跡が読み取れるのが、ウィルトシアが現地の習慣を学んでいく過程だろう。族長との交渉が失敗し、タブーが解けない主人公は島民との交易に頼ることができず、自らの手でコプラを作ることを余儀なくされる。その工程を通して、ウィルトシアはコプラの重量について「自分がどれほど騙されてきたのか」("how much the natives cheated me" 46) を知る一方で、「コプラはとても軽く、水をかけて重さをごまかしたい気分になる」("it weighed so light I felt inclined to take and water it myself" 46) と島民の見地から物事を眺められるようになる。また、ケイスの村人に対する絶対的権力の源泉となる密林の神殿が、空箱や木製人形などのがらくたの寄せ集めであることを発見したときには、彼はタブーを信じる島民の心理を考察する。

> Just go back to yourself any way round from ten to fifteen years old, and there's an average Kanaka. There are some pious, just as there are pious boys; and the most of them, like the boys again, are middling honest and yet think it rather larks to steal, and are easy scared and rather like to be so. I remember a boy I was at school with at home who played the Case business. . . . he just boldly said he was a sorcerer, and frightened us out of our boots, and we loved it. And then it came in my mind how the master had once flogged that boy, and the surprise we were all in to see the sorcerer catch it and bum like anybody else. (58)

それまで迷信として一蹴していたタブーを、ウィルトシアは島民との交流を通して「分析」しようとする。平均的島民が「10歳から15歳の（イギリスの）少年」に相当するという結論は、非ヨーロッパ人をヨーロッパ人の子供という範疇でとらえようとする伝統的なオリエンタリズム像であり、大人としてのヨーロッパ人、子供としての非西洋人の認識の肯定につながるものの、同時に島民と西洋人が共有する性質という同質性も指向する。なんの根拠もなく「自分は魔術師である」と言う同級生を恐れることを楽しんでいたはずなのに、いつの間にかその言葉が事実となり、集団が暗示にかかるという現象はル・ボンの『群衆心理』にも指摘されているとおり[v]、けっして若年層だけに帰せられる特質ではないからだ。タブーを信じる心理状態は成人した西洋人にも起こりうるという指摘は、この引用の直前における音の鳴る箱についてのウィルトシアの恐慌状態も説明するものでもある。ここにおいて主人公は島民への人種偏見を超越し、より客観的な視座に到達したかのようにみえる。

「ファレサアの浜」が提示するもっとも大きなアイロニーは、こうした客観的視座が主人公の人種的偏見になんら影響を与えないことである。最終ページでのウィルトシアの語りは、冒頭部で彼が繰り返し述べる人種観を捨てることができない様子を読者に伝える。

> My public-house? Not a bit of it, nor ever likely. I'm stuck here, I fancy. I don't like to leave the kids, you see: and—there's no use talking—they're better here than what they would be in a white man's country, though Ben took the eldest up to Auckland, where he's being schooled with the best. But what bothers me is the girls. They're only half-castes, of course; I know that as well as you do, and there's nobody thinks less of half-castes than I do; but they're mine, and about all I've got. I can't reconcile my mind to their taking up with Kanakas, and I'd like to know where I'm

to find the whites? (75)

ケイスを倒した後の順調な交易の様子、ケイスの悪党仲間の悲惨な運命、島民との公正な取引についてのタールトンとの約束と彼の帰郷が語られた後、話題は彼自身の状況に移る。ここで彼が吐露するのが、島民に対する白人の優位性を信じて疑わない態度と、「軽蔑してやまない」混血児を持った白人の父親という二重拘束的な状況である。しかもイギリスでのパブ経営という夢が叶わないばかりか、ウィルトシアは太平洋世界から離れることすらできない。自らの人種観を変えられないまま、太平洋で生活するしかないのである。「ファレサアの浜」は冒険物語の形式をとりながらも、アイロニカルに主人公を取り扱うことによって、太平洋における白人のあり方に対する批判として浮かび上がる。その批判はサモア紛争において島民の意思を無視し、傀儡の王を擁立したドイツの強引な政治手法への非難にも通じるのである。

しかしながら、「現実の南海を描く」という作家の意図が第三者の目にどう映るのかは別の問題である。植民地主義の大国への反対運動によって、スティーヴンスンがサモア人から大きな支持を得たことは事実であるが、「ファレサアの浜」が作家の当事者性を活用することで、「これまでのロマンスに流されてまがい物になってしまっていた」他の物語と一線を画したのかを考察する必要がある。とりわけ当事者性に焦点を当てるとき、別の当事者であるサモア人からはどう見えるのかが重要になるだろう。

III　ウェントが見たスティーヴンスン

太平洋作家の第一世代に属するアルバート・ウェントは、スティーヴンスンの死後から40年あまり経った1939年に生まれ、1960年代から執筆活動を開始した。多くの物語の舞台がサモアということもあり、彼の作品はたびたびスティーヴンスンに言及する。たとえば、初期のウェントの代表作「自由の木のオオコウモリ」(“Flying Fox in a Freedom Tree.” 1974)は、死期の迫った主人公が第二のスティーヴンスンになるべく筆を執り、自分の半生を語るという設定である。また『マンゴーのキス』(*The Mango's Kiss.* 2003) においては、スティーヴンスンはサモア人に理解のある心優しい作家、ステンソンとして登場する。ミシェル・キーオンは第二世代の太平洋作家シア・フィジェルによる扱い方と比較して、こうしたスティーヴンスン表象をウェントの敬意の表れと解釈する[vi]。しかしながら、スティーヴンスンの太平洋作品アンソロジーに寄せた彼の「前書き」を読むとき、彼のスコットランド人作家に対する評価がそれほど単純ではないことが分かる。

Robert Louis Stevenson has been a presence in my life ever since I was born. . . . Stevenson's burial was one of the first facts we learned from our grandmother and parents. So, daily, when we got up and gazed up at Mount Vaea, we 'saw' Stevenson and the legend of Tusitala. . . .

That legend, according to my grandmother and her generation, went something like this: “Tusitala was the most famous writer of his day, a Scotsman who, when he came here, was ill with consumption. He chose our small and insignificant country to write and die in. . . . Stevenson himself and Europe's romantic notions about the South Sea helped create and enlarge that legend. . . .

There weren't many books at my Intermediate School in Samoa but I read *Treasure Island* and *Dr Jekyll and Mr Hyde* and found them compelling and addictive. . . . Alas, when I went to boarding school in New Plymouth, New

Zealand, and became addicted to the school library, I couldn't get into much Stevenson's work. However, at the end of my prep school year, at the annual prizegiving, I was awarded *Kidnapped*.

Later at university, while I was researching the Samoan Independence movement, I found *A Footnote to History*. For me, that has remained Stevenson's most relevant work. It showed his astute and perceptive and enthusiastic support for our struggle against the foreign powers and colonialism. After all, Stevenson grew up in the Scottish anti-colonial struggle. And his views of colonialism were well ahead of his times. . . .

In the yet-unfinished novel, which I've been working on for about 16 years, Stevenson takes on the form of 'another' Papalagi writer who comes to Samoa to die, and becomes a major character and presence in the novel. (8-10)

この「前書き」で奇妙なのは、アンソロジーに収められた作品への言及がほとんどないことである。『歴史への脚注』を別にすれば、小説として『宝島』、「ジーキル博士とハイド氏」、『誘拐されて』といった、太平洋物語アンソロジーとは関係がない代表作が並んでいるだけなのだ。さらに不可解なのが、この引用に垣間見えるスティーヴンスンとの距離である。サモアでのスティーヴンスンの生活や、それについての年長者の証言、さらにはヨーロッパにおけるロマンチックな幻想などをウェントはすべて「伝説」という一つの言葉に還元し、彼が持つサモア人としての当事者性から遠ざけてしまう。そうした文章の調子においては、ウェントがスティーヴンスンの代表作にしか言及しないことで、「伝説的な」作家と彼自身との距離を物語っているのではないだろうか。そして「いまだ完成していない小説」と言及される『マンゴーのキス』に登場するミセス・ピボットの描写に目を向けるとき、スティーヴンスンの作品に対する、ウェントのけっして好意的とはいえない態度が浮かび上がる。

ミセス・ピボットはステンソンの使用人であるが、純粋なサモア人ではない。彼女はイギリス人の父とサモア人の母を両親に持ち、彼女自身もイギリス人の船長と結婚していた。彼女はイングランドでの生活を夢見ていたが、配偶者が財産を失ったためその夢も潰え、現在はステンソンの使用人としてその日の糧を得ている。あるとき彼女は主人公のペレイウプに自己の半生を物語る。

'My husband, bless his soul, was the captain of a ship, *The Swift Hawk*. He was from Bristol, in England. Mr John Robert Pivot, his name was. A righteous and gentle soul who loved me deeply. . .' She paused. 'He was lost at sea between Tonga and New Zealand six years ago.' Mrs Pivot stopped and Peleiupu expected to see tears. 'We had no children, yet I'm from a large family of nine brothers and six sisters. We were to settle in England after he made a lot of money in the copra trade, but he died at sea. I had hoped all my life to live in England, in London where my father, Captain James Rutherford Withers, was from.'

Then she described her parents and their thriving business and her childhood in Apia. 'It was difficult growing up in this small town among the Samoans, so my father sent me to New Zealand to a boarding school for rich people's children. I loved it there among my own people. . . .'

'The dishonest Samoans who worked for my parents stole their money eventually.

They even burnt our ship. I had to come back from boarding school to—to this place!' (96-7)

ブリストルという地名、ジョン・ロバート・ピボットという夫の名前、コプラ貿易、ジェームズ・ルーサーフォード・ウィザーという父の名前、ニュージーランドの寄宿学校から、「ファレサアの浜」との密接な関係が浮上する。ジョン・ロバート・ピボットはウィルトシアとスティーヴンスンの名前を想起させるし、父の名前のイニシャルは、ジョン・ウィルトシアと同じである。「ファレサアの浜」の冒険の原因がコプラにあったことは疑問の余地がないし、主人公がブリストルに地縁があることもスティーヴンスンの物語で仄めかされている（「すべて整然として、まったくブリストルと同じだった」（"all was shipshape and Bristol fashion." 14））。また、ウィルトシアは長男をオークランドの学校に行かせていたため、娘たちもそこで教育を受けさせる気になったとしても不自然ではない。無事に白人の男を見つけることができたウィルトシアの娘が『マンゴーのキス』に登場するのだ。しかしながら、この「ウィルトシアの娘」はステンソンに寄生し、ウィスキーを盗み飲み、彼の客と情事を交わすほどに零落している。父親の人種観を受け継いだ彼女は、サモア人を見下すことで自らのプライドをかろうじて保つ、根無し草の混血女性として描かれる。

自らを白人と同一視し他の島民に対して優越感を抱くポリネシア人は、糾弾されるべき対象としてこの小説だけではなく、オセアニア文学にはしばしば登場する。しかしながら、ウェントがステンソンを創作する一方で、スティーヴンスンの物語を改編し、主人公を破滅させるような筋書きをわざわざ作ってみせたことは、否が応でも読者の注意を引く。スティーヴンスンがウィルトシアの苦悩で締めくくった「ファレサアの浜」の白人の優越意識へのアイロニーは、ウェントにとっては十分ではなく、より徹底的に登場人物にその人種観の代償を支払わせているような印象を与えるのである。すなわち、スティーヴンスンが主張する太平洋の現実は、その表象の仕方において植民地の当事者には「現実ではない」のだ。このように考えると、アンソロジーの「前書き」に垣間見えるウェントのスティーヴンスンからの距離は、伝説の作家への敬意と批判が混じり合った結果として説明できないだろうか。

IV　既存の太平洋イメージの再生産

スティーヴンスンに対してのウェントの距離は、太平洋の現実を現地から語ることが読者に太平洋の現実を伝えることになるのか、という問題を提起する。現実を語ることによって、既成の太平洋イメージを強化することもありえるからだ。第二章で指摘したように、ウィルトシアがケイスの悪魔の神殿を特定する時、彼は島民の心理状態にまで踏み込んだ分析を試みた。しかし、そこで最終的に島民の発達段階を西洋人の少年時代に相当すると結論づけることによって、物語は西洋人の優位性を強調したともいえる。女性の描き方も、現実性を強調することで、かえって「楽園」を想起させるものとなりうる。現地人の妻を選ぶときにウィルトシアがケイスと交わす会話は、まさに18世紀末のブーガンヴィルの太平洋イメージの19世紀末版であり[vii]、美しい女性を意のままにできるという「男性の楽園」はスティーヴンスンの作品においても受け継がれていると解釈できるだろう。そして、作家が彼自身の当事者性を主張すればするほど、既成の太平洋像を当事者の立場から強化・再生産することになる。

「ファレサアの浜」による既成の太平洋イメージの再生産は、物語が冒険小説というロマンスの枠組みで語られることにも起因する。「ファレサアの浜」はそれまでの太平洋を舞台とした物語とはリアリティの点で異なるかもしれないが、結局は主人公が勝利を収める勧善懲悪的な

作品である。敵を倒した後は多少の欠点はあってもおおむね幸福な生活が約束されているため、伝統的な冒険物語の域を大幅に超える作品ではないともいえるからだ。しかしながら、太平洋イメージの再生産にはスティーヴンスン自身の自己表象の仕方も大きく関わる。サモアで彼が反植民地主義運動に身を投じたことは冒頭で触れたが、重要なのは、そうした状況においてあたかも彼自身が冒険小説の主人公であるかのような意識を持っていたことである。それを顕著に示すのは、シドニー・コルヴィンに宛てた1892年9月13日付の書簡である。

> The Chief Justice appeared; it was immediately remarked, and whispered from one to another, that he and I had the only red sashes in the room,—and they were both of the hue of blood, sir, blood. . . . When I and my great enemy found ourselves involved in this gambol, and crossing hands, and kicking up, and being embraced almost in common by large and quite respectable females, we—or I—tried to preserve some rags of dignity, but not for long. The deuce of it is that, personally, I love this man; his eye speaks to me, I am pleased in his society. We exchanged a glance, and then a grin; the man took me in his confidence; and through the remainder of that prance we pranced for each other. Hard to imagine any position more ridiculous; a week before he had been trying to rake up evidence against me by brow-beating and threatening a half-white interpreter; that very morning I had been writing most villainous attacks upon him for *The Times*; and we meet and smile, and—damn it!—like each other. (367-8)

私信であることを考慮に入れても、非常に芝居がかった内容である。アピアで開かれた舞踏会でスティーヴンスンは、思いがけずサモアの行政長官と出くわす。「一週間前には彼は自分に不利な証拠をかき集めていた」一方で、スティーヴンスンは「当日の朝まで『タイムズ』向けに長官をさんざんこき下ろす書簡を書いていた」という極度の対立関係にあるにもかかわらず、「我々は一瞥を交わし、にやりと笑い合う」という、あたかも小説の一場面を思わせる様子がここに展開される。さらにスティーヴンスンは「不思議なことに、個人的にはこの男が好きなのだ」、「我々は邂逅しほほえみ合う。そして、なんてことだ、お互いに好意を抱いている！」と自己陶酔を隠さない。ウェントが指摘するように、伝記的な側面に、物理的距離によって生み出される「ヨーロッパの（太平洋についての）ロマンチックなイメージ」が加わるだけでも、スティーヴンスンの伝説化を充足する要素となるのだが、自らが劇中の登場人物を演じることよって、彼自身のイメージをさらに強固なものにしてしまっているのである。

見方を変えると、スティーヴンスン自身が虚構のヒーローたりえる状況を備えすぎていたのだ。帝国主義列強による植民地紛争、部族間闘争と民族主義の台頭という非日常的な環境に、病弱であるが義侠心にあふれた人気作家という登場人物は、冒険物語には申し分のない設定だろう。スティーヴンスンはいわばフィクションの中の住民であり、彼の当事者性もまたフィクションとして解釈されてしまう危険性を十分に孕んでいた。さらには、当人も虚構的な状況を望んでいた形跡がある。そうした状況の中で書かれた「ファレサアの浜」は、虚構の人物が現実を描こうとして作った虚構となるし、太平洋から遠く離れた読者にとってはもはや「南海の現実を伝える」という意図はさしたる重要性を持たない。シドニー・コルヴィンが繰り返しスティーヴンスンの政治運動を諫めたのは、それが大して報われないことを認識していたためだ

ろう[viii]。スティーヴンスンが大きな歴史の波に没入するほど、読者との距離は離れてしまう。結果として、「ファレサアの浜」は既存のロマンスのジャンルに収斂してしまったともいえるのである。

「ファレサアの浜」や『歴史への脚注』を書いたものの、真実を伝える「現地の情報発信者」としてスティーヴンスンは不適格だったのかもしれない。しかしながらこのことは、誰が適格なのかという新たな疑問を提起する。ポリネシアのことはポリネシア人にしか語れないのか。その場合のポリネシア人とは誰か。男性か、それとも女性か。伝統文化と西洋文化との折り合いはどう付けるべきなのか。こうした話題は1990年代から今日に至るまでオセアニア地域で盛んに議論されてきたし、今後も検証されていくだろう 。スティーヴンスンが強調した当事者性という概念は、彼の意図を超えて100年後の太平洋世界にその資格を問いかけることになるのである。

注

本論考は日本英文学会中部支部第67回大会（2015年10月）における口頭発表「太平洋世界の情報発信者としてのR. L. スティーヴンスン」に大幅に加筆したものである。また、本研究は平成26～28年度科学研究費基盤研究（C）「太平洋における地方性の研究」の成果の一部でもある。

i　太平洋イメージの変遷についての代表的な研究書として、Edmond, *Representing the South Pacific* (1997)、Rennie, *Far-Fetched Facts* (1998)、Lansdown, *Strangers in the South Seas* (2006)などが挙げられる。また女性表象に特化した研究では、Sturma, *South Sea Maidens* (2002)が優れている。

ii　島の動植物の様子が描かれる物語の前半部において、登場人物の一人が「椰子の実をズボンのポケットに入れる」（"thrusting the nuts into his trousers pocket" 39）描写があり、バランタインはそれによって彼の不正確な知識を露呈することになった。

iii　『ヴァイリマ・レター』はスティーヴンスンの死後、サモアの生活を述べた書簡を集めて刊行された。本論考におけるページ番号はBooth and Mehewによる書簡集に依拠している。

iv　Brantlinger, *Rule of Darkness* 39-44ページを参照。ここで著者は「ファレサアの浜」とコンラッドの作品との相同性を探っているが、そうした比較は近年の太平洋表象研究においても行われている。

v　ギュスターヴ・ル・ボン『群集心理』35ページ参照。

vi　Keown, "Isles of Voices" 54-5ページ参照。ここではウェントのスティーヴンスンに対する態度が好意的に解釈されているが、ウェントの作品中での白人の表象方法は決して好意的とはいえず、スティーヴンスンだけを例外として考えることには違和感がある。

vii　Bougainville, *A Voyage round the World* 217-8ページにはタヒチを訪れたときの島民による歓待が衝撃的に叙述されている。"The piraguas were full of females; who, for agreeable feature, are not inferior to most European women; and who in point of beauty of the body might, with much reason, vie with them all. Most of these fair females were naked; for the men and the old women that accompanied them, had stripped them of the garments which they generally dress themselves in." (217)

viii　1894年3月21日付のコルヴィンからスティーヴンスンに宛てた書簡にかなり強い調子で述べられている。*The Letters of Robert Louis Stevenson* vol.8 279ページの脚注を参照。

ix　こうした議論はとりわけ1990年代に活発に議論されており、代表的な論考としては以下の書籍がある。Waddell, Naidu, and Hau'ofa eds. *A New Oceania* (1993)やHereniko and Wilson eds. *Inside Out* (1999)が挙げられる。

引用文献

Ballantyne, Robert Michael. *The Coral Island.* New York: Garland, 1977. Print.

ボン, ギュスターヴ・ル.『群集心理』. 櫻井成夫訳. 東京: 講談社, 1993. Print.

Bougainville, Lewis de. *A Voyage* round *the World.* Trans. John Reinhold Forster. New York: DaCapo P, 1967. Print.

Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914.* Ithaca: Cornell UP, 1988. Print.

Edmond, Rod. *Representing the South Pacific: Colonial Discourse from Cook to Gauguin.* Cambridge: Cambridge UP, 1997. Print.

Figiel, Sia. *Where We Once Belonged.* 1996. New York: Kaya Press, 1999. Print.

Hereniko, Vilsoni and Rob Wilson, eds. *Inside Out: Literature, Cultural Politics, and Identity in the New Pacific.* Lanham: Rowman and Littlefield P, 1999. Print.

Keown, Michelle. "Isles of Voices: Scotland in the Indigenous Pacific Literary Imaginary." *International Journal of Scottish Literature* 9 (2013): 50-67. Print.

Lansdown, Richard, ed. *Strangers in the South Seas: The Idea of the Pacific in Western Thought.* Honolulu: U of Hawai'i P, 2006. Print.

Rennie, Neil. *Far-Fetched Facts: The Literature of Travel and the Idea of the South Seas.* Oxford: Oxford UP, 1998. Print.

Stevenson, Robert Louis. "Island Nights' Entertainments." *The Works of Robert Louis Stevenson.* Eds. Lloyd Osbourne and Fanny Stevenson. Vol. 13. London: Heinemann, 1924. Print.

---. "In the South Seas." *The Works of Robert Louis Stevenson.* Ed. Loid Osbourne and Fanny Stevenson. Vol. 20. London: Heinemann, 1924. Print.

---. "A Footnote to History." *The Works of Robert Louis Stevenson.* Ed. Loid Osbourne and Fanny Stevenson. Vol. 21. London: Heinemann, 1924. Print.

---. *The Letters of Robert Louis Stevenson.* Eds Bradford A. Booth and Ernest Mehew. Yale: Yale UP, 1995. Print.

Sturma, Michael. *South Sea Maidens: Western Fantasy and Sexual Politics in the South Pacific.* Westport: Greenwood Press, 2002. Print.

Waddell, Eric and Epeli Hau'ofa, eds. *A New Oceania: Rediscovering Our Sea of Islands.* Suva: U of South Pacific P, 1993. Print.

Wendt, Albert. "Acknowledgement." *Robert Louis Stevenson: His Best Pacific Writings.* Ed. Roger Robinson. Honolulu: Bess Press, 2003. 9-11. Print.

---. *The Mango's Kiss.* Auckland: Random House, 2003. Print.